教文研だより

kyo bun ken

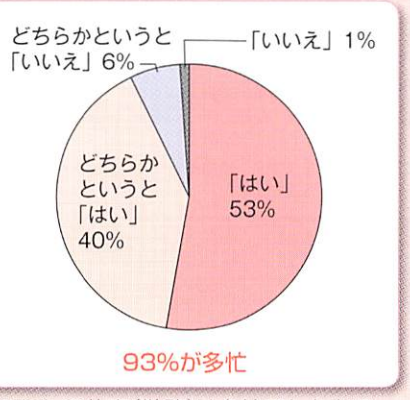
kyobunken
2013.10
152号

2012 教育実態総合調査をどう読み取るか？
～教文研委員からの発信～

93%が多忙、残業 2 時間以上が 66%、月 2 日以上休日出勤が 60%

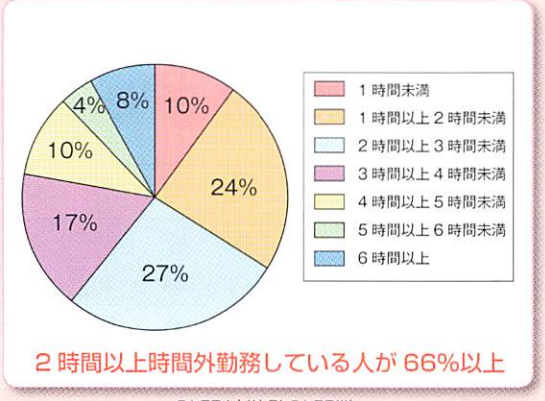
2000 人の教職員の声を聞いた 2012 教育実態総合調査結果では、こんな学校職場実態が浮き彫りにされた。

県教文研では、この調査について月 1 回のカリキュラム総合改革委員会で研究討議をすすめています。今回はその中からお二人の委員からの論考を掲載します。学校現場での多忙化解消に向けて参考にしていただければ幸いです。県教文研では学校現場からのご意見等もお寄せいただきながら、多忙化解消に向けた議論をすすめていく予定です。



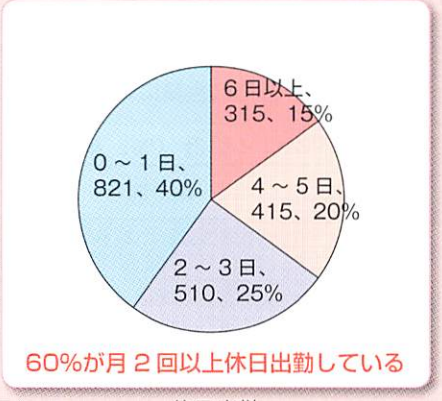
93%が多忙

あなたの仕事(勤務)は多忙でしたか？



2 時間以上時間外勤務している人が 66%以上

時間外勤務時間数



60%が月 2 回以上休日出勤している

休日出勤

(2012 教育実態総合調査結果速報より)

2012 年、神奈川県教職員組合と神奈川県教育文化研究所は共同で、県下の約 2000 名の小学校、中学校、特別支援学校、高等学校の教職員を対象に教育実態総合調査を行いました。お忙しい中でのご協力ありがとうございました。結果速報については 6 月に各学校 1 部送付していますので、ご覧下さい。

神奈川県教育文化研究所

教員は子どもの心に耳を傾けているか
―教育実態総合調査から

宮島　喬

2000人の声を聞く

直接子どもたちに向き合って行う本来の教育活動のほかにさまざまな業務に追われることが日に日に増しているといわれる教職員。この多忙さ、多忙感のなかで、子どもとの触れあいは減っていないのか、子どもの心を思いやり、語り、表現するといったことは行われているだろうか。教育実態総合調査の中の一部の設問から、このことをたずねてみよう。

多忙感9割、だが、触れ合いはなんとか確保したい

会議・打合せ、提出物・成績処理、行事の準備、研修への参加、・・・等々で「多忙」、「やや多忙」と訴えている回答は計93%にもおよぶ。では、子どもと触れ合う時間は十分とれていると思うか――6割以上の教職員は「思わない」と答えている。予想した通りといえる。20台ではまだこれが3割台であるが、40台、50台ではノーが目に見えて増えている。

だが、しかたがない、と諦めるわけではなく、教師のアイデンティティとして、限られた時間のなかで努力しているという姿は読みとれる。なぜなら、「児童生徒の身になって考え、共に喜んだりすることがありますか」の問いには、「はい」と「ややはい」を合わせて9割以上がイエスと答え、「児童生徒のよいところを見出し、褒めることがありますか」にも、ほとんど同様の答えが示されているからだ。教職員の本来の職務はそこにあるのだ、という思い、そして子どもと共にあるために自分は努力しているという気概が伝わってくる。

子どもの状況、変化に気付いているか

子どもの言葉に耳を傾けたい、子どもに寄り添いたい、という主観的思いは強いことが分かる。ただクラスのなかの児童生徒の動静、行動の変化などに観察、把握がおよんでいるか。Aさんは最近服装や持ち物がだいぶ変わった、Bさんはしばらく前から友人と仲たがいし孤独なようだ、等々。「児童生徒の示す小さな変化にもに気づいていますか」「児童生徒の友人関係を把握していますか」という二つの設問がこれに対応する。

答えは中学校でイエスが7割となり、小学校の85～86%とくらべると、統計的有意差が認められるくらいに低くなっている。やはり中学になると教科制となるため、パースナルに生徒と触れあったり、観察によってすぐに生徒の行動を知るのはむずかしくなるのかもしれない。そのなかで、小中を通じて女性教職員は二つの設問ともに、男性教職員よりも高い割合でイエスと回答していることに気づく。より子どもの日常に目を向け、声に耳を傾け、細やかな観察眼を働かせているのだろう。

「子どもは必要以上に他者の目を気にしている」

学校に多くの時間を送っている子どもたちも、時代の子、社会のなかの子である。自分は自分でありたいという気持ちと、友だちやその他の他者と共にいたい、または他者からはずれたくないという気持ちが、交錯しているだろう。そして他者と共に居るということが当人の自尊感情の一部を形成しているかもしれない。

教職員への設問は、「今の児童生徒は他者の目を必要以上に気にしていると思いますか」であり、回答は合わせて8割強が「思う」「やや思う」を選択している。「必要以上に」という文言が入っていて、これだけの回答だから、教職員たちは、子どもたちの他者志向をやや行き過ぎの傾向とみているのだろう。

仲良しの友だちができることは、自己肯定感をもてる一要素なのかもしれない。しかし、共に流行の物をもち、身に着ける、タレントについて共通の話題をもてる、といった結局相手に合わせることに尽き、そういう他者志向は内心「くだらない」と冷めている子どももいると思う。教職員の目も、そうした両面をともに理解し、包んでやらなければならない。

クロス集計（%、縦の合計が100%）

	設　問		小学校	中学校	男	女	20台	30台	40台	50～	多忙である	多忙ではない
1	児童生徒とふれあう時間は十分確保されていますか	はい	47	46	46	47	64	54	42	38	31	61
		いいえ	53	54	54	53	36	46	58	62	69	39
2	児童生徒の身になって考え、共に喜んだりすることがありますか	はい	96	93	93	95	98	96	94	84	95	91
		いいえ	4	7	7	5	2	4	6	16	5	9
3	児童生徒のよいところを見出し、褒めることがありますか	はい	98	97	97	98	98	96	97	88	97	98
		いいえ	2	3	3	2	2	4	3	12	3	2
4	児童生徒の示す小さな変化に気づいていますか	はい	87	82	81	89	81	85	87	88	82	81
		いいえ	13	18	19	11	19	15	13	12	18	19
5	児童生徒の友人関係を把握していますか	はい	85	72	76	83	86	86	80	71	80	72
		いいえ	15	28	12	17	14	14	20	29	20	28
6	今の生徒は他者の目を必要以上に気にしていると思いますか	はい	78	88	80	84	79	81	83	85	83	76
		いいえ	22	12	20	16	21	19	17	15	17	24

パーセントは加重合計:「はい」のパーセンテージ×2と「どちらかといえば<はい>」のパーセンテージの合計が「はい」の値。「いいえ」のパーセンテージ×2と「どちらかといえば<いいえ>」のパーセンテージの合計が「いいえ」の値。

教育現場の多忙感と負担感

浅見　聡

神奈川県教職員組合と神奈川県教育文化研究所では、昨年度教育実態総合調査を実施。本年６月に『結果速報』としてまとめを刊行した。私が今回本調査に関わるのは、2005年の前回調査に引き続き二度目となる。本調査のアンケート項目作成から結果の分析まで関わらせていただいた一員として、以下記してみた。

教職員の多忙化問題

『結果速報』冒頭でも触れているが、今回の調査では、特に教職員の多忙化の問題に多くの項目をたてた。

神奈川県教育文化研究所では、数年前から「教職員の多忙化問題」をテーマとして議論がなされ、課題や提言を発信してきた。その中で出た論点の一つが「多忙化している教育現場の現状と、教職員自身が抱く多忙感や負担感とは別に考え」「その上で多忙感と負担感がどうリンクしているかをとらえよう」というものだった。それは換言すると、議論の中で発せられた「（やるべきことはいつも山のようにあるが）自分の好きなことが出来て充実感があれば、忙しさは感じないのではないか」という一言に集約できる。今回の調査項目はそうした認識をベースとして作成された。

もちろんこうした認識は危うさをともなう。つまり「多忙化の原因を＜個人の内面＞に見出そうとする」危険性である。教職員個人の充実感の有無が「教職員の適性」に読みかえられて、物理的にあきらかに多忙化している現状を無視して「教職員の精選」が図られるとしたらそれは恐ろしいことである。このことも十分踏まえた上で、私たちは本調査を実施・分析したことを、読者諸氏にはおことわりしておきたい。

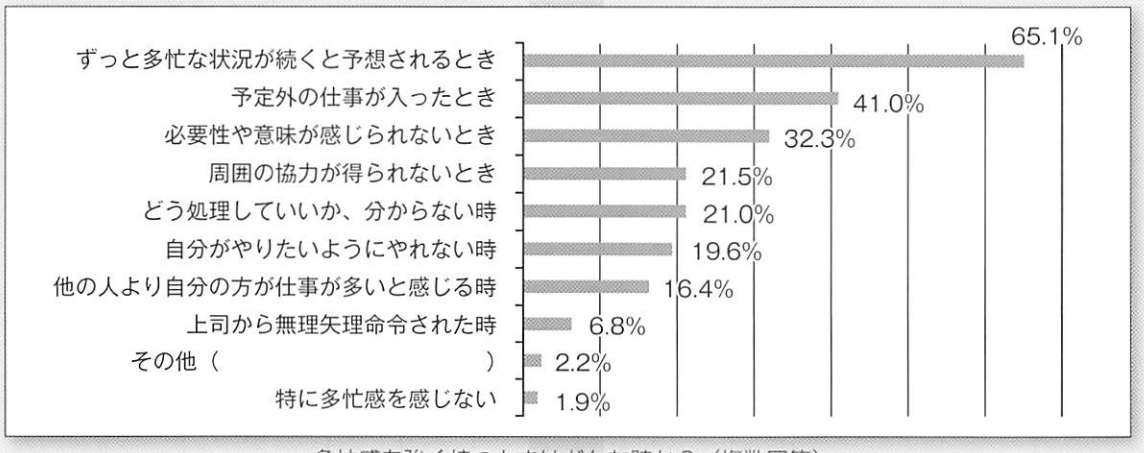
教育現場の多忙感

以下、本調査で私が担当させていただいた箇所を中心に述べさせていただきたい。

「多忙感を強くもつときはどんな時か」という質問に対し、ほぼすべての校種、職種で「ずっと多忙な状況が続くと予想されるとき」という回答が一番多かった。教育現場は人間相手の現場であり、「テストの採点が終わった」「運動会が終わった」という具合に「形式的に終わりがある」ものばかりでなく、児童生徒の指導に終わりはない。その上に、子どもたちと直接かかわるのではない会議や書類の処理等の仕事が山のようにあれば、多忙感はいや増していく。優先順位をつけ、どこかで区切りをつけないと潰れてしまう。

同じ質問の回答率第２位には「予定外の仕事が入ってきたとき」があげられた。教育現場は「今を生きている子どもたち」が相手である。他の業種と比べ、きめ細やかな個別対応（これには目に見えない内面理解や信頼の醸成なども入ってくる）が求められ、予定外の仕事をこなすために２倍３倍の労力が必要とされる場合が多い。結果的にかなり多忙になる。

同質問で興味深いのは、回答率第３位の「必要性や意味が感じられないとき」である。職種別にみても、総括（主幹）教諭と一般の教諭を比較してもほぼ同じ割合で回答があった。仕事の精選は共通課題ということだろう。



多忙感を強く持つときはどんな時か？（複数回答）

教育現場の負担感

「多忙であっても負担感を感じないときはどんな時ですか」という質問について、回答率第１位は「やりがいを感じる時」であった。

「やりがい」というのは、教育専門の職業人としてのそれよりも、もっと広い意味をもつ。誤解を恐れずに言えば、児童生徒のためばかりではなく、自分にとって「やってよかった」という深い満足感をともなうものだ。教職員である前に、一個人として感じるものであるがゆえに、最も大切なことといえる。第１位になるのは頷ける。

同質問の回答率第２位は「児童生徒のためになると感じる時」。これは、教職員の「プロとしてのアイデンティティー」にかかわる大事なことだろう。新採用時から退職時まで、あるいは正規雇用も非正規雇用も、現場で子どもたちと関わる教職員は全員もっていてほしい感覚である。この感覚さえ鈍くさせるような労働環境があるとすれば、それは最悪だし、改善されねばならない。

同質問の回答率第４位「上司や同僚が協力してくれるとき」ならびに第５位「周囲の協力得られるとき」が、職場環境を改善していく際の最も大切な視点であることは論をまたない。「やりがい」を感じたり、「子どもたちのために」何かができるのも、職場の協力・同僚性があってこそだろう。同じ仕事量でも仲間と協働している時と、相談もできずに一人ですべて背負っている時では、負担感は大きく違う。

職種別に検討すると、養護教諭にこの回答が多いことがわかった。実は上記「多忙感を強くもつときはどんな時か」の質問についても、「周囲の協力が得られないとき」と回答した率は、他の職種に比べて養護教諭が高かったのである。教室外での児童生徒を知る養護教諭が、結果的に問題を一人で抱え込んでしまう場合が多い。このことについて、私たちは留意する必要がある。

なお「周囲の協力」といった場合、その「周囲（の人々）」には、児童生徒の保護者や地域の人たち、（学校外の）友人や諸機関、さらには自分の家族が含まれるとすると、この「協力問題」はまた個別に検討するべき今後の課題だろう。

あたりまえに大切なこと

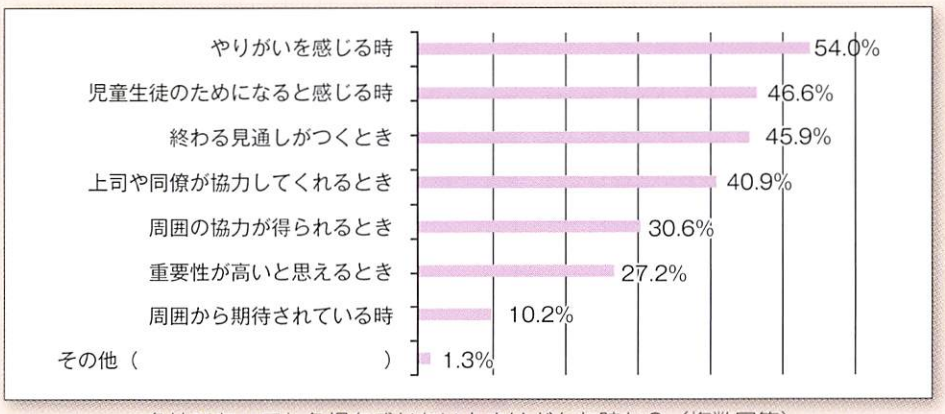
賢明な読者諸氏ならもうお分かりと思うが、調査結果から浮かび上がってくる実態と、それを踏まえての大切な視点というのは、以下のようなあたりまえのことだ。

私たち教職員は、子どもたちとのふれあいがあって、その子どもたちの中に教育の結実を見る職業人だ。程度の差こそあれ、そこには多忙を超える喜びが存在する。つまり子どもとの関係性が第一であるということ。職場での実態がこの基本軸に近ければ近いほど負担感はなくなる。

第二には、すでに記したが、職場の同僚性、仲間意識である。馴れ合いではなく議論すべきはする、しかし課題を共有し相談しあえる職場ないし仲間の存在は、負担感を間違いなく軽減してくれる。まずは気になる同僚に声をかけて。挨拶だけでも（メールでも）。やがて互いに自分（の悩み）を開けるようになれば、その職場は強い。

そして第三には、上記したことをふまえて、職場で話し合いの上「仕事の精選」を断行する。それはつまり「必要性の低い仕事をやらない工夫」の創出である。目的は違うが、ある意味こんなことは一般企業であたりまえのこと（労働活力を高める省力化）だ。本調査でも、大半の回答者の共通認識といっていいだろう。

教職員の皆さんには、子どもたちのために、どうか「よけいな仕事をやらない工夫」を、行政の皆さんには、子どもたちのために、どうか「よけいな改革をやらない工夫」を、お願いしたい。



多忙であっても負担を感じないときはどんな時か？（複数回答）

発行所／神奈川県教育文化研究所　〒220-0053 横浜市西区藤棚町 2-197 神奈川県教育会館 2F　TEL.045(241)3497